

保育所保護者における貧困と 子育て・家庭生活の悩み・不安・困難

—— 名古屋市保育所保護者への生活実態調査から ——

中 村 強 士

要 旨

近年、「子どもの貧困」が社会問題化しているが、乳幼児期の貧困については十分な検討がなされていない。すでに貧困家庭における保育所保育料の滞納や生活困難、子育ての悩みや不安は深刻な社会問題になっている。そこで本研究では、乳幼児期の貧困問題の構造を明らかにすることを目的に、名古屋市の保育所保護者を対象に大規模な質問紙調査を実施した。本稿は、この調査結果から子育て及び家庭生活に関する悩み・不安・困難について分析したものである。

その結果、第1に、「子どもの学習面の遅れ」「子育て費用の不足」「生活費」「借金」「病気・障害」の5つが所得の増減とリンクしやすいこと、第2に、貧困層の保護者はすでに「貧困の連鎖」に不安を抱えていること、第3に、「生活費」「仕事」「やりたいことができない」の3つが貧困層を象徴する生活問題であること、第4に、貧困層の約4人に1人が社会的に孤立していることの諸点を確認できた。

キーワード：乳幼児期の貧困，子育て，家庭生活，社会的孤立

1. はじめに

今日の保育所には、発達障害児を含む障害のある児童，被虐待児，外国籍児の保育等，より専門的ケア技術を要する保育が求められている。また，核家族化・地域社会の希薄化等により育児の孤立，経済状況悪化による家庭生活へのストレス等，子育ては保護者にとって厳しい状況にあり，家庭環境に問題をもつケースが増えている。子どもは家庭での保護者のストレスや不安を受

け、それをそのまま保育所での生活に様々なトラブルや不安として示すことが多い。よって、これまで保育所が重視してきた集団活動だけでなく、個別対応・支援を必要とする子どもが増加している。つまり、保育所には家庭支援と個別支援の両方の機能が求められている。しかし、支援の対象である家庭のうち、いわば「貧困家庭」への支援についてはこれまでそれほど取り上げられてこなかったと言ってもよい¹⁾。

実方氏は、保育料を滞納する貧困家庭には、ネグレクト（養育の怠慢・拒否）が隠れていたり、生活能力が未成熟のため計画的に生活をすすめることが困難な場合もあるという（実方2008）。片岡氏は、生気のない表情の姉妹と不眠症に悩む母親、仕事や生活が忙しくなって溜まったストレスを子どもにぶつけてしまう母親など、家庭へのフォローの必要なケースが1年で20数件あったという（片岡2009）。

貧しさゆえに仕事（その多くは長時間労働かつ低賃金）をかけもちする親は、仕事に疲れ、健康面に不安を抱えやすい。家庭で子どもとゆったり過ごす時間もとれないため、子どもが幼いうちから親子関係が希薄になる。こうして親子ともに悩みや不安、困難を抱えるようになることは容易に推測できる。

筆者の研究課題は、乳幼児期の貧困に対する保育制度及び保育実践のあり方を考察することにある。そのためには、まず、保育所保護者がどのような子育てを行っているかを正確に把握しなければならない。特に、子育てのありようが社会階層によって異なるのかどうか、貧困層の子育てにはどんな特徴があるのかを正確に知る必要がある。

筆者は、名古屋市内の保育所保護者へのアンケート調査結果から、すでに基本属性にみる貧困層の特徴を明らかにした²⁾。年収150万円未満の等価世帯所得のグループを「貧困層」とし、彼ら貧困層にある保護者は他世帯の保護者と比較して、第1に、保護者の年齢が若いということ、第2に、子どもの年齢が幼いほど貧困とは言えないこと、第3に、子どもを多く育てていること、第4に、ひとり親家族の半分以上を占めていることの諸点を確認した。

本稿は拙稿を引き継ぎ、保育所保護者の子育て及び家庭生活に関する悩みや不安、困難に関して貧困層にみられる特徴を明らかにする。貧困と子育て・家庭生活の悩み・不安・困難との関連が確認できれば、これに対応する法制度や実践の手がかりが発見できる。

2. 方法

1) 調査方法

調査対象は、名古屋市内における公立・私立合わせたすべての保育所保護者である（全数調査。公立120か所、私立186か所。調査時）。調査方法は、下記の方法で調査票を配布し、郵送で回収した。①公立保育園の場合、名古屋市公立保育園父母の会の定例幹事会にて、当該父母の会に加盟する各公立保育園（77か所）父母の会代表に手渡しした。また、定例幹事会に欠席し

た父母の会については後日郵送した。なお、当該父母の会に加盟していない公立保育園（43か所）については、「父母の会」宛に郵送した。②私立保育園の場合、各私立保育園園長宛に郵送した。

調査期間は、2012（平成24）年10月1日～12月25日である。回収状況は、①対象母数：35,008名（平成24年4月1日現在の在籍児童数）、②回収数：14,089通（うち有効調査票は、13,641通）、③回収率：40.2%（うち有効回収率は、39.0%）となった。実施主体は筆者の研究室、集計は株式会社一誠社に委託した。

2) 分析方法

まずは、本稿における「貧困層」をあらかじめ定義しておきたい。OECDは等価世帯所得の中央値の2分の1を「貧困」と定義している。本調査では、父母の年収を世帯所得とし、世帯人数の平方根で除した等価世帯所得を求めた結果、中央値が300万円となった。その2分の1である150万円の世帯を本研究（本稿）では「貧困層」と呼ぶことにする。

等価世帯所得は4つにカテゴライズした。①150万円未満（＝貧困層）、②150万円以上300万円未満、③300万円以上600万円未満、④600万円以上、の4区分である。なお、所得を収入と同じ意味として用いる。

回答者及び配偶者の年齢は、①20歳未満、②20歳～29歳、③30歳～39歳、④40歳～49歳、⑤50歳～59歳、⑥60歳以上、の6つに区分した。配偶者がいない場合は、「配偶者はいない」の項目に○をつけてもらった。また、子どもの年齢については、「今年（2012年）4月1日現在のお子さんの年齢」を月単位まで尋ねた。さらに、きょうだいについても人数と年齢を尋ねた。

家族構成については、①父親、②母親、③きょうだい、④祖父母、⑤その他の人のうち該当するものを尋ねた。きょうだいには保育園児を含めた。また、父親または母親が単身赴任の場合には、①父親もしくは②母親と同時に該当項目を選択するようにした。

等価世帯所得とこれらの基本属性についてクロス集計を行った。処理にはSPSS20 for Windowsを用いた。

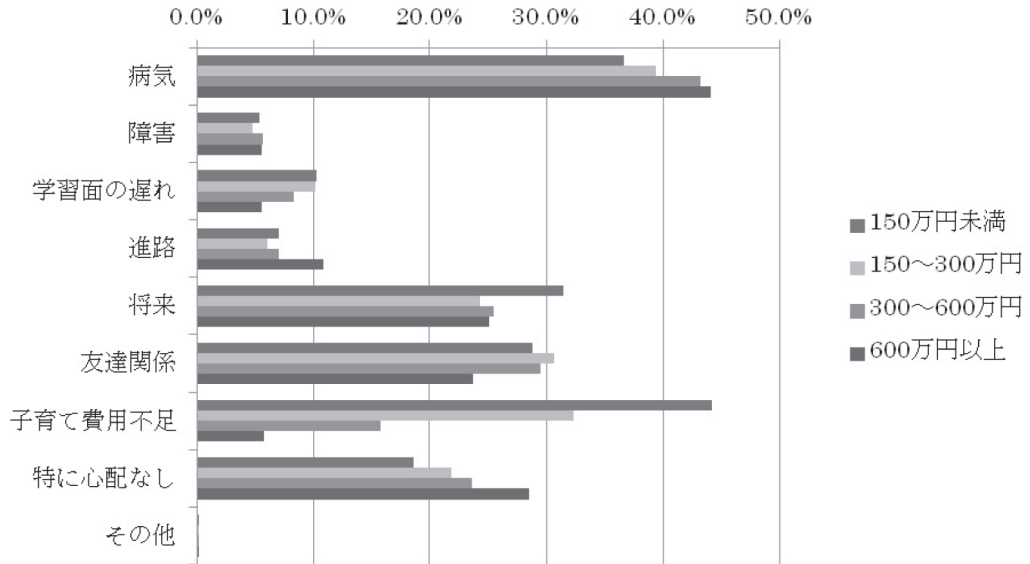
3) 倫理的配慮

調査にあたっては以下の3点に配慮した。①得られた情報は統計データとして処理し、この学術調査のみで使用すること、②無記名式で回答いただくために回答者のプライバシーを守り、個人情報漏れや、迷惑をかけたりすることがないこと、③他者に見られないよう封ができる封筒を渡し、質問紙回収の際の秘密の保持に配慮した。

3. 結果

1) 子育ての悩み・不安・困難

図表1 等価世帯所得階層別子育ての悩み・不安・困難



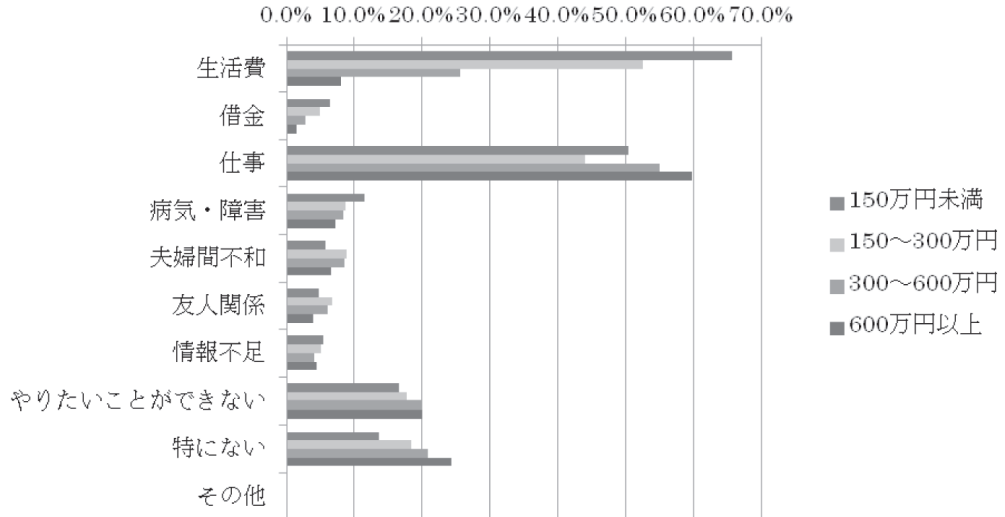
	病気	障害	学習面の遅れ	進路	将来	友達関係	子育て費用不足	特に心配なし	その他
150万円未満	36.6%	5.3%	10.3%	7.0%	31.4%	28.8%	44.2%	18.6%	0.1%
150~300万円	39.4%	4.8%	10.1%	6.0%	24.4%	30.7%	32.3%	21.8%	0.1%
300~600万円	43.2%	5.6%	8.3%	7.0%	25.5%	29.5%	15.8%	23.7%	0.1%
600万円以上	44.1%	5.5%	5.5%	10.8%	25.1%	23.7%	5.7%	28.5%	0.1%
合計	41.0%	5.2%	9.0%	6.9%	25.8%	29.5%	25.0%	22.7%	0.1%

図表1は、「子育ての悩みや不安・困難」について、9つの選択肢のうち「あてはまるものを3つまで」と指定した質問の調査結果である。合計で最も多いのが「子どもの病気」であり(41.0%)、次いで「子どもの友達関係」(29.5%)、「子どもの将来」(25.8%)となっている。

等価世帯所得階層別にみると、「子どもの学習面の遅れ」「子育て費用の不足」の2項目について等価世帯所得が低いほど高い割合を示している。他方、「子どもの病気」「特に心配なし」の2項目は等価世帯所得が低いほど低い割合を示した。また、「子どもの将来」については、「150万円未満」の貧困層のみ高い割合を示した。なお、すべての階層において最も回答率が高いのは貧困層の「子育て費用の不足」である(44.2%)。

2) 家庭生活の悩み・不安・困難

図表 2 等価世帯所得階層別家庭生活の悩み・不安・困難



	生活費	借金	仕事	病気・障害	夫婦間不和	友人関係	情報不足	やりたいことができない	特にない	その他
150万円未満	65.8%	6.5%	50.5%	11.7%	5.9%	4.7%	5.4%	16.8%	13.7%	0.1%
150~300万円	52.6%	4.8%	44.1%	8.9%	9.1%	6.8%	5.1%	17.9%	18.5%	0.1%
300~600万円	25.7%	2.8%	55.1%	8.5%	8.7%	6.2%	4.0%	20.2%	20.9%	0.1%
600万円以上	8.1%	1.5%	59.8%	7.3%	6.7%	3.9%	4.5%	20.2%	24.3%	0.1%
合計	39.7%	3.9%	50.7%	8.9%	8.3%	6.1%	4.7%	18.9%	19.3%	0.1%

図表 2 は、「あなた自身の子育て以外の悩みや不安・困難」について、10 の選択肢のうち「あてはまるものを 3 つまで」と指定した質問の調査結果である。合計で最も回答が多かったのが「仕事」である (50.7%)。次いで「生活費」(39.7%) となっている。

等価世帯所得階層別にみると、「生活費」「借金」「病気・障害」の 3 項目で等価世帯所得が低くなるほど割合が高くなる結果を示している。他方、「悩み・困る事なし (特にない)」は等価世帯所得が低くなるほど割合が低くなる結果となった。

3) 貧困層にみる子育てと家庭生活の問題

図表 1・2 とともに、複数回答 (3 つまで) の結果である。では、どのような組み合わせの回答が多かったのだろうか。また、等価世帯所得階層の違いでその組み合わせにどのような変化が見られるのだろうか。これらの分析を行うことによって貧困層における子育てや家庭生活の問題をさらに明らかにしたい。

(1) 子育ての悩み・不安・困難

図表3 等価世帯所得階層別子育ての悩み・不安・困難の組み合わせ

		150万円未満	150-300万円	300-600万円	600万円以上
絶対値	1	費用	病気	病気	病気
	2	病気	費用	病気+友達	病気+友達
	3	病気+費用	友達	友達	病気+将来+友達
相対値	1	費用	友達	病気+友達	病気
	2	病気+費用	友達+費用	病気+将来	病気+将来+友達
	3	将来+友達+費用	病気+学習+友達	病気+障害+将来	将来

図表3は、子育ての悩み・不安・困難の組み合わせを等価世帯所得別に回答の多いものから順に第3位まで、絶対値と相対値とをそれぞれ整理したものである。ここで「絶対値」とは当該等価世帯所得階層内でのランキングであり、「相対値」とは他の等価世帯所得階層を含めた全体におけるランキングである。したがって、絶対値のランキングは階層間で重なることはあるが、相対値のランキングは階層間で重ならない。相対値のランキングとは、様々な組み合わせがどの階層に最も集中するかを表している。では、あらためて図表3を見てみよう。

まず絶対値を見ると、第1に、「子どもの病気」はすべての階層に共通してあげられている。第2に、貧困層には「子育ての費用不足」が唯一あげられる一方で、他の階層にはあげられている「子どもの友達関係」がない。

次に相対値を見てほしい。貧困層は、絶対値と同じく「子育て費用の不足」が第1位となっている。また、絶対値にもあがっていた「子どもの病気」と「子育て費用の不足」の組み合わせが相対値でもあがっている。さらに、「子どもの将来」や「子どもの友達関係」についても悩みや不安を抱えていることがうかがえる。

なお、本設問は複数回答であるものの、絶対値を見るとわかるようにどの階層も1位は1つしか選んでいないものとなった。これは、回答者が「複数回答」という点を見落としてしまったケースと、他と比べてもこれしか子育ての悩み等はないというケースとの両方が考えられる。

(2) 家庭生活の悩み・不安・困難

図表 4 等価世帯所得階層別家庭生活の悩み・不安・困難の組み合わせ

絶対値		150万円未満	150-300万円	300-600万円	600万円以上
	1	生活費+仕事	生活費	仕事	仕事
2	生活費	生活費+仕事	生活費+仕事	生活費+仕事	仕事+や
3	生活費+仕事+や	仕事	仕事+や	仕事+や	や
相対値	1	生活費+仕事	生活費+や	や	仕事
	2	生活費	生活費+仕事+夫	仕事+夫	仕事+や
	3	生活費+仕事+や	生活費+夫	仕事+友人	仕事+病障

※「や」=やりたいことができない／「夫」=夫婦間不和／「病障」=病気・障害

図表 4 は、家庭生活の悩み・不安・困難の組み合わせを等価世帯所得階層別に回答の多いものから順に第 3 位まで、絶対値と相対値とをそれぞれ整理したものである。

まず絶対値を見ると、第 1 に、貧困層では第 1 位から 3 位まで「生活費」があがっている。第 2 に、一方の等価世帯所得 600 万円以上階層では生活費の悩みはあげられていない。第 3 に、「仕事」はすべての階層にあげられている。

次に相対値を見てほしい。貧困層は、絶対値と同じく「生活費」と「仕事」の組み合わせが第 1 位となっている。1 位だけでなく、2・3 位も絶対値とまったく同じである。絶対値と相対値が同じということは、これらの問題が貧困層に集中しているということである。また、150～300 万円階層でも「生活費」が 3 つともあがっている

4) 貧困と社会的孤立

本調査では、「日頃、保育所以外にお子さんを預かってもらえる人がいるか」という問いを複数回答で尋ねた（回答者 13,539 人）。選択肢は、「日常的に祖父母などの親族に預かってもらえる」「緊急時（病気・残業など）や用事の際には祖父母などの親族に預かってもらえる」「日常的に子どもを預けられる友人・知人がいる」「緊急時（病気・残業など）や用事の際には子どもを預けられる友人・知人がいる」「いずれもない」の 5 項目である。ここで注目したいのは「いずれもない」と答えたのが 22.6%もいたという事実である。この「いずれもない」と回答した世帯を「社会的孤立」世帯と定義したとき、等価世帯所得階層とりわけ貧困層とどのような関係にあるだろうか。

図表 5 等価世帯所得階層別社会的孤立世帯の割合

	150万円未満	150-300万円	300-600万円	600万円以上	計
実数	360	1,038	1,159	168	2,725
割合	23.5%	22.7%	22.9%	19.5%	22.6%

図表5のとおり、貧困層のうち23.5%が社会的孤立という問題も抱えており、それは他の階層と比べて最も高い割合を占めている。つまり、貧困層は他の階層と比べて社会的孤立という問題も抱えやすいということである。

2. 考察 — 貧困層にみる子育て・家庭生活の悩み・不安・困難の諸相

まず、貧困層における子育ての悩み・不安・困難について考えてみよう。全階層では「子どもの病気」「子どもの友達」「子どもの将来」の3つの悩みや不安が高かった(図表1)。ところが階層別にすると、「子どもの学習面の遅れ」と「子育て費用の不足」とが所得が低くなるほど高い結果となった。これら2つの項目は所得の減少によって抱えやすい、つまり所得の増減とリンクしやすい問題といえる。一方、「子どもの病気」と「心配なし」については、所得が低くなるほど低い結果となった。最も回答率の高かった「子どもの病気」が、世帯所得が低くなればなるほど低くなるのはなぜだろうか。子どもが病気になっても仕事を休める環境にあるからだろうか。または、子どもの病気にさえ頭が回らないほど生活に困窮しているからだろうか。貧困層の「特に心配なし」の回答率が高かった理由と合わせて今後の課題としたい。また、当然のこととはいえ、貧困層の「子育て費用の不足」が44.2%と他項目を抑えて最も高い割合を示した。貧困層は目の前の子育てを切り盛りすることに精いっぱい。しかし同時に「子どもの将来」についても他階層と比べて貧困層の回答率は高い結果となっている。この点を考えれば、貧困層は、他階層の保護者と同様に子どもの未来を真剣に考えているのであり、これと現状とのギャップを強く認識していることがうかがえる。つまり、「貧困の連鎖」に不安を抱えていると言ってよい。いずれにせよ、わが子が乳幼児期の段階から「将来」に不安を抱えている保護者が25.8%(4人に1人)、さらに貧困層のそれが31.4%(約3人に1人)だった点は特筆すべき点である。さらに図表3を見ると、それでもなお貧困層の悩み・不安は「病気」や「友達」「将来」よりも「子育て費用の不足」に強くあることを指摘しておきたい。

次に、貧困層における家庭生活の悩み・不安・困難を見てみよう。全階層では「仕事」と「生活費」の回答率が高かった(図表2)。ところが階層別にすると、「生活費」と「借金」「病気・障害」の3つが低所得になるほど高い結果となった。これらも所得の増減とリンクしやすい問題と言える。たしかに借金をするほど生活費に余裕のない家庭は、病気の治療も抑制しかねない。一方「特にない」のみ低所得になるほど低い結果となった。これも先述の「心配なし」と合わせて今後調べてみたい。

図表4をみると、貧困層の絶対値と相対値のランキングはまったく同じである。よって、「生活費」「仕事」「やりたいことができない」の3つが貧困層を象徴する生活問題であることが明確になった。

また、「やりたいことができない」を組み合わせのひとつにしている点を考えれば、「やりたい

こと」があるという「強さ」を貧困層の保護者はもっていることがわかる。ところで、1階層上の「150万から300万円世帯」と比較すると、「夫婦間不和」があるかないかの違いだけに見える。しかし、この階層は「生活費」と「やりたいことができない」の組み合わせが他階層と比べて最も高い。ということは、所得が上がれば「やりたいこと」が貧困層に比べてより明確になるのかもしれない。さらに「300万円」以上の所得になれば、「生活費」の不安から脱出でき、今度は「仕事」にかかる不安が大きな位置を占めるようになる。

最後に、図表5からわかるように、実に貧困層の23.5%が社会的孤立を抱えている。構成割合を見るかぎりでは、所得が低ければ低いほど社会的孤立になりやすいわけではない。しかし、貧困層の約4人に1人が社会的に孤立しているという事実を深刻に受け止めなければならない。彼らは保育所保護者として保育所に日常的にアクセスしているにもかかわらず、である。よって、保育所は貧困家庭の生活を支えるだけでなく、これ以上孤立させないための防波堤にもなっているとと言える³⁾。

3. 課題

名古屋市という地方都市に限定されているものの、保育所保護者における子育て及び家庭生活の悩み・不安・困難の実態とその貧困層に見られる特徴を明らかにすることができた。さらに研究を進めるためには次のような課題が残されている。

本稿で分析した保育所保護者アンケートの調査項目は一部である。他に、①「イライラしたことがある」などの具体的な子育て経験、②保育所・保育制度への要望、の項目もある。よって、貧困層や社会的孤立世帯の若い子どもの親が具体的にどのように子育てを経験しているのか、今回と同様に検討し、乳幼児期の貧困問題の構造を明らかにする。また、本稿で明らかになったように、貧困層において子育てや家庭生活の悩み・不安・困難に対して「特に心配なし」と答えた保護者に対する分析も重要な課題である。これらをもって、乳幼児期の貧困に対する保育制度及び保育実践のあり方を考察することが筆者の課題である。

謝辞

質問紙調査にご協力くださいました保護者の皆様はじめ関係者の皆様、ご指導いただきました北海道大学の松本伊智朗先生、明星大学の垣内国光先生、同僚の斉藤雅茂氏に心より御礼申し上げます。

付記

本研究は科学研究費研究活動スタート支援（課題番号23830099）「保育所における子どもの貧困問題の構造化とその対策に関する研究」の成果の一部である。

注

- 1) 保育所保育指針に「地域子育て支援」や「保育所における保護者支援」が加わるに伴い、「家庭支援」「家族援助」「保育相談支援」「保護者支援」などの専門書が出版されている。しかし、これらで取り扱う事例などに「貧困家庭」を想定したものはほとんどないといってよい。もっとも、例えば子ども虐待という事例に対して、その「背景としての貧困」がある場合は容易に考えられる。
- 2) 拙稿(2014)「保育所保護者における貧困層の特徴 一名名古屋市保育所保護者への生活実態調査から一」『日本福祉大学社会福祉論集』第131号
- 3) こうした貧困家庭を支える保育所の事例については、(赤旗社会部「子どもの貧困」取材班2010)、(保坂渉・池谷孝司2012)を参照されたい。

文献

- ・赤旗社会部「子どもと貧困」取材班(2010)『「誰かボクに食べものをちょうだい」』新日本出版社
- ・片岡恵美(2009)「子どもらしさを奪う時代 一困難な家庭を支える保育所」子どもの貧困白書編集委員会『子どもの貧困白書』明石書店
- ・実方伸子(2008)「保育の場からみる子どもの貧困」浅井春夫・松本伊智朗・湯澤直美『子どもの貧困 一子ども時代のしあわせ平等のために』明石書店
- ・保坂渉・池谷孝司(2012)『ルポ 子どもの貧困連鎖—教育現場のSOSを追って』光文社